地域の青年を組織して

和歌山県 紀ノ川農協

若者たちの始めた産直がいま地域までを巻き込んで

1　ささえあう農業の発見

自然のサイクルにあった農業

農業を継いで二〇年がすぎた一昨年、紀ノ川農協組合員である畑敏之さんは初めて米づくりに挑戦した。

ミカンづくりの農業を父親から受け継ぎ、野菜の生産にもチャレンジしてきた。それでも、稲作に関しては生まれて初めて。四〇歳になる二〇年目で、まったく素人の状態からのスタートだった。

「いままで農業やってきて、いつもなんか足りないって自分で思ってたんですわ。今年、初めて田植えしてみて、これやったんちゃうかって気持ちがしてね。自分で食べるもんは自

分でつくる。それが農業の基本でしょ。そう考えたら、やっぱり米が主やから、米をつくれたのは喜びだったんですわ。なんか、足が地についた感じでね」

自分たちの主食となる、米の栽培。その実践は畑さんにまた、自分たちの取り組んできた農業の別の面を見せてくれるきっかけともなった。

「米づくりでは一年生でしょ。田植えをしてるとみんなよってきてね。いっしょに作業してくれて、自分の経験を教えてくれるんですわ。水まわりはこうするんやとか、板はこういれてとかね。そのとき、農業っていうのはみんなでやるもんなんや。助け合うつながりっていうのが、米をつくってる農家にはまだあるんやなあって思ったんです」

奈良の吉野地方に源流を発し、和歌山県を横切って流れる紀ノ川。その中程に位置する那賀町の山の中腹に、紀ノ川農協の本部はある。組合員数は、約八〇〇名。全県にまたがっているが、ほとんどが紀ノ川流域のような山がちの土地で、傾斜地に畑をひらいて農業を営んでいる農民ばかりだ。

大阪から特急の列車にのって、一時間ほど。府県ざかいの和泉山脈をぬけると、急に眺望が開ける。和歌山市のある紀ノ川の下流域は、広々とした平野になっている。しかし、紀ノ河流域でも平坦な地域といえば、ほとんどこのあたりだけ。岩出町、打田町、粉河町と、川沿いの道路をさかのぼって農協本部のある那賀町に近づいていくにしたがって、両側の山なみがせまってきて、耕作できるような平地がどんどん少なくなっていくことがよくわかる。

那賀町や粉河町では現在でも、耕作地に占める果樹園面積が九〇%近い状態がつづいている。

もともと平地の少なかった和歌山では、山の斜面と日当たりがよく温暖な気候にあった、柑橘類の栽培がさかんだった。ミカンの木は、人が歩けないような急峻な山肌にもびっしりと植えこまれ、山の頂上近くまで畑としてひらかれてきた。

春から初夏にかけて、ミカンの花が咲きほこる山々。夏には南国の強烈な日差しをうけて、つややかな葉が緑に輝く。そして秋、たわわに実った一面のミカンが、豊穣を感じさせる。そんな変化に富んだ和歌山の風景も、農民たちの努力と苦悩のなかで築かれ、守られてきたものだった。

川沿いのわずかな平地でできるのは、せいぜい自家用にするための米や野菜ぐらい。出荷して生計をたてるための農業は、山の急な斜面に植えたミカンに頼るしかない。紀ノ川農協の多くの組合員たちも、親の代やそれ以前から、そういう農業を営んできた。しかし頼るべきミカンさえもがたびかさなる暴落の波を受け、翻弄されてきたのが和歌山の農民たちの歴史だったのだ。

畑敏之さんがミカン栽培の農業を父親から継いだのは、一九七三年。第一次オイルショックあったこの年は、ミカンの大暴落のあった年としていまでも農民たちのあいだで語りつがれている。この年をさかいにして、ミカン栽培から転換したり、農業そのものをあきらめる農民は数しれなかった。その年以来、ミカン畑の減反も開始されていく。

「だから僕は、今年はミカンの景気がええとか、ミカンでもうかったっていう経験したことがないんです」

もうミカンづくりには見通しがない。農業ももうだめだ。みんなが、口々にいっていた。だが、そんな厳しい状況だからこそ逆に、自分たち若者に出番があるのではないか。何かおもしろいことができるのではないか。畑さんはそう考えた。

地元の高校を卒業した畑さんは、農協の職員を養成する中央協同組合学園で三年間勉強した。ここを卒業した人の多くは、県の農協中央会や連合会にいって、将来は幹部になっていく。しかし畑さんには、その道を進むつもりは最初からなかった。いずれは親のやっている農業を継ぐ。それまでの何年間かに、農業に関係のあるところで、少し社会をひろく見てみたいと思っていた。

卒業が間近になったとき、研修で全国の農業の実践例を見学してまわった。茨城県で、協同でいろいろな組織をつくって、地域を守っている人たちの実践などが新鮮にみえた。

「僕らがいるこの地域は、主体がミカンの柑橘類専作地帯でしょ。ミカンだけしかつくらんていう人が、しだいにふえていたんですわ。ミカンづくりは大規模専業農家になるから、他の人と関係なく自分だけでやる農業になっていく。まわりには関係なく、自分ひとりの力でってね。僕としては、そんな農業のありかたに疑問をもちつづけていたんですわ」

農業っていうのは、こんなものなのか。野菜の輪作や家畜の飼育などもふくめて、総合的

に展開する自然のサイクルにあった農業の形がほんとうなのではないか。いだきつづけてきた疑問に、研修でみた協同でおこなう農業の実例は、ひとつの回答をあたえてくれているように思えた。

「味のええミカンをつくる」

地元に帰って、地域農業をかえていこう。みんなで力をあわせられる、本物の農業をやってみよう。希望をもって帰郷したとき、那賀町農協の青年部で活動していた西浦正晴さんや中山富晴さんたちと出会うことになる。

「ミカン価格の暴落がつづいていたときでしょ。このまんまでは、農業に希望がもてなくなる。どうしたら高値で売れるミカンがつくれるだろうかって、青年部で栽培法なんかもずいぶんと研究したんですよ。ノルウェーから取り寄せた海草を肥料にしてみたり、ミカン以外のネーブルなんかをつくってみたり」

そのころはまだ農協青年部の活動も活発で、畑さんと同年代の二〇歳そこそこの青年たちも三〇人ほどはいた。みんなで研究してだした結論は、甘味のある味のいいミカンをつくっていくことだった。

「味のええミカンをつくれば、必ず消費者は買うてくれる。味をよくするための手をうっていこう」

けれども、青年部のだした結論は、農協全体にすんなりとは受け入れられなかった。そこから青年農業者たちの、ほんものの農業を求める活動が始まっていった。

2　産直に希望をかけて

産直を意識した農民組合づくり

七五年の五月におこなわれた那賀町農協の第一二回総代会に、青年部は五項目の要請書を提出した。

①事業計画の目的、趣旨からまったくかけはなれた形の農薬予約取扱いを撤廃すること。
②加工用ミカンの最低価格保証。一キロ当たり三五円を国や県に積極的に要請活動をする。
③農業用資材の原価の公表を企業に義務づけ、国会にその調査権を与えるために活動する。
④海外農畜産物に対し国に輸入阻止を要求する。
⑤那賀町農協の現行の全品目全量委託制を撤廃し、品目別数量園地指定申告委託制を取り入れよ。

ミカン価格の大暴落がつづくなか、農協は必ずしも農家の経営を守るような事業に力をいれていない。ミカンの適正な価格を保障し、農業がつづけていけるような運動と事業を展開してほしい。

青年部の主張は多くの組合員の同意をえた。署名活動をすると、四〇〇名が賛成の署名をしてくれた。ところが、総代会での採決になると、要請は採択されなかった。味のよいミカンをつくれば高く売れるという考えも否定され、あいかわらず外見ばかりにとらわれたミカンの評価がつづけられた。

「そのころになると、五〇名ぐらいはおった青年部のメンバーも農業をやめていって、一〇名をきるような状態になっとったんですわ。みんな農業に見切りをつけて、勤めにでていくわけです。このままでは、那賀町の農業は衰退する。ワシらの力でなんとかしちゃろう。青年部の仲間たちで、そう話し合っていたんですわ」

農協が動かないならばと、自分たちの力でミカン農業を再生させる道を模索していったのだと、現在の紀ノ川農協組合長である西浦正晴さんは語る。

組合員の井上雅夫さんは高校をでた七三年から二年間、農林水産省直轄の柑橘類栽培専門の学校へ通った。ハッサクを主に栽培していた父親に、当面は農協の技術者になるのもいいとすすめられたからだった。

学校には、四国や九州などからきた、大規模な柑橘栽培農家の後継者たちが集まっていた。ちょうどミカンの大暴落の時期。それなのに、同級生たちは目の輝きがちがうように井上さんにはみえた。

「みんな大産地の、御曹司ばかりですよ。ミカンはもうだめだっていわれてるのに、必ず

家を継ぐっていうつもりで、みんな元気いっぱいなの。ミカンがだめでも、他の柑橘類がよかったこともあるしね。そんな友達といつも話してたら、こっちも早く農業やりたくなってね。親はまだいいっていうのに、学校でると同時に手伝い始めたのね」

卒業がせまったころ、同級生がそれぞれ自分の家でつくっているミカンをもちよって、味や糖度、酸味などを調べる研究会をひらいたことがあった。二五人いる同級生のもってきたミカンのなかで、自分の家でつくったミカンはビリから二番目の低い評価だった。和歌山県は、日本一のミカンの産地。自信をもっていた井上さんは、大きなショックを受けた。だが、たしかに九州の友達がもってきたミカンを口にしてみると、自分の家のミカンよりはるかに甘味があっておいしいことがわかった。そういうミカンは、和歌山産のものより値段も高く売れていた。

「那賀町のミカンはなんで安いんや」

畑さんたちが参加していた青年部の活動も、そういう疑問から出発したものだった。他産地のミカンを箱ごと取り寄せて味見してみると、やはり味がちがっていた。これからは、中身の勝負や。味のいいミカンをつくっていこう。品評会などをして品質を高める活動を、青年部は五年ほどつづけた。

しかしその努力も、農協からは認めてもらえない。ついに青年たちは、七六年に農民組合を結成して独自の道を歩んでいくことをきめた。老人いこいの家でおこなわれた結成総会で

きめられた当面の活動のなかには、「生活防衛手段として、直販・共同購入をおこなう」という項目がはいっている。ミカン暴落から農業と生活を守るために、最初から産直を意識してつくられた農民組合だった。

「不安もあったけど、那賀町農協ではもう食うていきやんていう気持ちが強かったからね。あの当時、僕は年収二〇〇万円きってましたよ。こんなんでは生活できないっていう、思いのほうが強かったね」

結成総会に参加した一六人のなかにはいっていた畑さんは、そのころの思いをふりかえってそう語る。

産直のノウハウとスタート

農民組合結成の準備をしているころ、那賀町農協の青年部長になっていた畑さんは、東京でおこなわれた全国農協青年部大会で近畿代表として発表をした。その帰り道、いっしょに参加した何人かの仲間で、静岡県の細江農民組合を見学にいった。細江農民組合は当時すでに、生協などを相手に産直を開始している組織だった。

「そこで産直のノウハウを教えてもらってね。いちばん最初の産直は、衆議院議員をしていた野間先生に青森の津川武一議員を紹介してもらって、そのつてで弘前生協病院へ送ったことだったね。僕と中島一清さんのとこのミカンを、四トントラックにつんで」

一方では西浦さんたちが、奈良市民生協の青年部幹部に話をもちかけ、産直への道を探っていた。関西に市民生協が次々と設立され、発展していく時期だった。どの生協も、産地を探していた。外観にとらわれず、味がよく安全なミカンを。消費者の要求にきちんとこたえるミカンづくりをすれば、展望はみえてくると確信していた。

農民組合が結成された年から、奈良市民生協との産直が正式にスタートした。初代の組合長となった中山富晴さんの倉庫が、修理されて集荷センターになった。専従職員はゼロ。一キロあたり一〇円の経費だけをとって、配達まで自分たちでやるという手探りのスタートだった。

「すべて農民の力で完結せなあかん。それが産直や」

合言葉のように、そう語り合っていたという。産直にかける農業青年たちの生きいきとした気持ちが、いまでも伝わってくるようだ。

中島さんや西浦さんは、一トン半のトラックを購入した。二トン車をもっている組合員もいた。奈良市民生協から、大阪かわち市民生協へ。それでも余ってしまうミカンをトラックにつんで、西浦さんたちは大阪の新興住宅団地にもっていって直販した。

そんな苦労が実を結び、産直相手の生協も関西一円から東北、関東へと順調に拡大。いっしょにやっていこうという組合員数も、二年目の七七年に五一名。七八年には七五名とふえていった。

3　徹底して追求された品質の向上

七五年に親の農業を手伝い始めたばかりだった井上さんは、三年先輩だった中山さんからさそわれて農民組合の結成大会に参加していた。

「おもしろいことやるから見にこいっていわれて。でも、まだ産直がどういうものかなんて、まったくわかんなかったね」

親の手伝いといっても、経済的な部分はまだすべて父親が管轄しいていた。井上さんは農民組合にも参加せず、そのまま二、三年がたっていった。

「そのうち、親子契約して一定の部分を自分の裁量にまかせてもらったの。最初は青果農協にだしたり町の農協にだしたりしたけど、値段も安いし努力が報われないんだよね。中山さんからはミカンがたりないから出荷してくれ、味がよかったらいい値で買い取るっていわれてたでしょ。そんなら完熟するまで木に成らしておけばいいんだし、秋の消毒もせんでええっていうから、これやったらええわって、農民組合に参加する気になったんだよね」

収穫したミカンをもって農民組合にいくと、「最低一〇度の糖度が必要」といわれた。味のいいミカンをつくって、確実に消費者に買ってもらうようにしよう。中身をよくする目標を掲げていた青年たちは、独自に糖度の出荷基準をつくっていたのだった。最低一〇度という糖度の基準は、その言葉とは逆にけっして「甘い」ものではなかった。

「うちの畑は、北向いてるところが多くってね。条件も悪いんで、糖度基準に達しないで〝お持ち帰り〟にさせられることもよくあったのよ。それまでは、糖度を基準にするなんて考えたこともなかった。量産すればよかったからね。それから肥料かえたり努力して、やっと味も定着していったね」

井上さんが手伝い始めたころ、父親は値段のいいハッサクづくりに力をいれていた。八〇年にはその値段が暴騰し、井上さんは「そのおかげで結婚できた」という。ところが、ハッサクでのもうけに目をつけられて、翌年、税務署が調査に踏み込んでくる。

「おまえんとこ、もうけすぎや。税金たりないんやないかってね。百姓なんて税金のことなんかしらないから、そういわれたらびびってしまうんよ。そこで農民組合にかけこんで、調べてもらったの。したら、もうけもあるけど経費もようけかかってるってことがはっきりして、セーフやったんよね。それがいいきっかけで、農民組合とのつながりも強くなっていったわけ」

やがて井上さんは、ハッサクも出荷してくれるように農民組合から要請される。ミカンは組合でなければもうからないが、ハッサクに関してはまだ市場価格のほうがずっと高い状態がつづいていた。迷いに迷った末、ハッサクも少しずつ出荷するようになっていく。

「父親からは、なんで安い組合なんかにだすんやって、ずっと怒られたね。手伝ってくれ

ないから、はいはいする子どもを選果所へつれてって、柵のなかにいれといて夫婦で箱づめしたのよ。親はいつも市況みて、〝いまなんぼや〟てきくんや。でも、一時の相場ではほんまはあかんし、ハッサクだけでなくミカンも含めてトータルに考えたら、産直がいいにきまってる。でも、なかなかわかってもらえなくって、〝トータルに考えろよ〟としかいえなかったね」

昔から農民たちは、市況の変動に一喜一憂して、暴騰のときに一攫千金を夢みて農業を営んできた。

「選挙のある年は、ミカンの値段が高くなる」

「博覧会があるときはカレーがようけでまわるから、タマネギの値が高騰する」

「ハッサクの値段が四月に安いときは、貯蔵しておけば五月の連休にはきっとよくなる」

冗談とも受け取れるような話を本気になって信じこみ、農民たちは不安定な農業経営をつづけてきた。そういう農民にとって、安定はしているが暴騰もない産直出荷を理解することは、とてつもなく大きな転換だったのだろう。

「うちでも、外見ばかりで味が落ちるものをよりわけてたら、おやじに〝なんでこんなええのを抜くんや〟っていわれて、ミカンを顔にぶつけられたもんね」

畑さんも産直を始めたころの思い出を、そうふりかえる。

一二〇名、一五〇名と急速に拡大していった農民組合は、八一年に岩出町、下津町の農民

組合の事業も統一して産直センターとなる。その後も規模はふくらんで、八二年には組合員数三九四名、当初はいなかった専従職員も九名をおくまでに成長していった。

西浦さんたちはこの間も一貫して、地元の農協に農協内部で産直に取り組むことを提案し、説得に努力してきた。自分たちだけが、よければいいのではない。地域の農民すべてが展望をもてなければ、農業を継続していくことができないという思いがあったから。

しかし、最後まで農協の理解は得られなかった。八三年になって、金融事業を除いた販売と購買専門の農協として、紀ノ川農協が設立された。取り引きする生協の数は三二。売上高一〇億円。自分たちでトラックを運転して都会まで運んだ産直は、わずか七年ほどで地域に確固とした基盤を築くまでになっていた。

4　いろいろな人が参加するから産直

生産者の「班会制度」と「品目別部会」

産直組織としての規模の拡大は、かならずしもよい影響だけをもたらすとはかぎらない。運営が機械的、効率的になればなるほど、個々の組合員と消費者との距離は逆に遠くなってしまう。品質の問題に関しても、すべての生産者が同じようなレベルで向上していくのはむずかしくなるかもしれない。「顔のみえる」産直の理念が、なおざりにされてしまうことも

あるだろう。

それらの点で当初の目的をあいまいにしないために紀ノ川農協が取り入れたのは、班会制度と品目別部会の徹底だった。

班会は、地域ごとに二〇名ほどが単位となってつくられる。出荷する相手生協も班会ごとに限定されているので、交流や意見交換などがしやすいようになっている。品目ごとの部会では、生産者どうしがノウハウを共有しあい、農協全体の生産物の品質を向上させるためにみんなで取り組むシステムになっている。

試行錯誤の野菜づくり

農業を継ぐなら、ミカン生産だけをつづけるつもりはない。自然のサイクルにあった、総合的な農業を地域に確立したい。学校をでて那賀町にもどったときからそう考えていた畑さんは、いっしょに野菜をつくろうと仲間に働きかけていた。農民組合が結成されて二年目の七七年には、早くも栽培に取り組んでいる。最初に選ばれたのは、タマネギだった。

「もともとこの土地は、タマネギ産地だったんですわ。昔はつくってた人もおったし。それに、収穫のサイクルがちょうどミカンと逆になるんで、年間の労働配分にもいい。柑橘類が厳しくなっていたんで、一時しのぎにつくってみようと考えた人もたくさんおったみたいです。生協との契約があれば、つくった分はなにがしかの収入にはなる。産直のよさは、ミ

カンで実証済みでしたから」

現在、紀ノ川農協の常務理事をしている松本和広さんは、タマネギ栽培を始めたころのいきつをそう説明する。

本来タマネギは、化学肥料だけでつくれる代表的な作物だった。手間も経費もかからないのが、農民にとっては魅力だったのだ。けれども、生協に出荷する以上は、やはり有機栽培を心がけなければならない。ミカンでも、有機肥料をいれればいれただけ甘くなるのは、経験していた。

「タマネギなんかにわざわざ金と手間かけて、なんで堆肥なんかいれなあかんのやって、ずいぶん反対もありました。でも、僕らがつくるのは、こういうタマネギだって主張して」

ミカンに使う有機肥料を、タマネギ畑にもいれてみたらどうやろ。迷いながらも、畑さんたちが先頭にたって堆肥をいれ、タマネギを栽培してみた。生協とつながるのに、何か特徴をつけたかった。ところが、できたタマネギはらっきょうのように、小粒のものばかりだった。

「その原因が何なのかは、いまでもようわからんのです。味はたしかにええんやけども、いっこうに収量があがらない。化学肥料なら反当たり六トンぐらいはとれるのに、いくらがんばっても三トンぐらいにしかならない。そんな年がつづきました。収量がいまみたいに安定するまで、五、六年はかかりましたね。組合員のあいだで、すったもんだもありましたよ」

初めての野菜づくりは、試行錯誤の連続だった。市場のタマネギ価格が暴騰して、農民組合の産直タマネギ価格が半値ほどになってしまったこともあった。それでもやめていく仲間は、ひとりか二人ぐらいのものだった。それだけみんな、ミカンで知った産直にかける思いが強かったのだろう。

有機栽培でつくる紀ノ川農協のタマネギは、甘くておいしい。現在では、全国の生協で高い評価が定着している。市販のタマネギの糖度は六度から九度ぐらいなのに、紀ノ川農協のものは一一度にもなる。畑さんが部会長をつとめる紀ノ川農協のタマネギ部会には、いま八〇人ほどの生産者が参加してきている。糖度の高いタマネギをつくる努力も、収量を一般の栽培なみにあげる努力も、みんなで力をあわせてつづけてきたことだった。

総合的な農業をやりたい。そう考えてはいたが、最初はどこから何をしたらいいかまったく思いもつかなかった。農協青年部から農民組合にはいってみると、野菜づくりをしたり米づくりをした経験をもつ、いろいろな農民が参加してきた。みんなの話を聞き、力をあわせることで幅の広い農業を展開してくることができた。

人のつながりができた産直

「農業を継いで産直をやっていちばんよかったって思うのは、いろんな人といろんな作物で話し合いができて、町の人とも結びついて仕事ができることですね」

昔から農民は、自分の田や畑のなかで自分の力だけを頼りにして生きてきた。人よりも一時でも早く、人よりも少しでも評価の高いものをつくることが、自分のもうけにつながった。そこには、「協同」して力をあわせる条件などなく、競争のなかでの弱肉強食にも近いようなルールだけが成り立っていた。

そんな農村に「産直」は、革命的ともいえるような人のつながりをつくっていった。組織と組織のつながりになる産直では、ひとりの仲間の生産物が低い評価を受けることは、全体の評価が低くなることにつながる。自分ひとりがよいものをつくっても、組織全体のレベルがあがらなければ利益につながらない。技術力の高い者が、初心者を指導する。みんなで話し合って、品質を向上させていく。いままでの農村にはみられなかった生産の場での人のつながりが、産直のなかから生み出されていった。

しっかりした組織体系をつくってから、産直にはいったわけではない。中間搾取がなくなるからええんや。始めはその程度の、単純な考えだったと西浦組合長はいう。生産者を明確にする。農薬をへらす。産直三原則にあるような、基本理念だけを掲げてやってきた。

「いちばん大事にしてきたのは、組合員一人ひとりが消費者と触れること。そこを大事にしてきたんが、地域農業を守るための組織づくりにつながってきたっていうことなんやないでしょうか」

5　地域のみんなで楽しい農業を

みんなが教えてくれた技術

井上さんは数年まえ、長年育ててきたハッサクの木を切って野菜づくりの畑に転換した。もともと水田を転換した土地で条件が悪く、いつかはハッサクもつくれなくなると考えていた。そうはいっても、輸入野菜の増加で価格が抑え込まれているこの時期。産直で確実な収入が見込めなければ、野菜づくりには踏み込めなかっただろうという。

「でも、それ以上によかったのは、みんながよってたかって技術を教えてくれたこと。こっちはずぶの素人でしょ。こうしたら、これだけ収量があがる。これだけ味がよくなるって、掛け値なしに本心から教えてくれたんだよね」

だからこれからは自分が、新しくはいってくる仲間に技術を教えることができる。こうしたらこれだけとれると、具体的に指導していけると井上さんは語る。

野菜も育てるし人も育つ

産直を始めてから二〇年がすぎ、紀ノ川農協に参加する生産者は八〇〇名をこえた。次の時代を担っていく若い生産者も、どんどんふえてきている。

「これからもずっとキュウリでいきたい。新鮮なまま消費者に届けられるのが産直の魅力と思う。ずぼらしてたらそれだけのもんしかできん」

三二歳の児玉修さんは、元気がいい。

「たまたま好きだった彼が農家であったということ。農業を語る資格はありませんが、気持ちだけは農業をやるつもりです」

二四歳という若さの中谷京子さんは、群馬県から紀ノ川の農家に嫁いだばかり。体力がもつか心配といいながらも、初めて野菜や果物を「育てる」楽しさに胸をふくらませている。

若い世代をリードしていく立場の畑さんは、これからは紀ノ川農協の組合員であるかないかだけにこだわらず、農業にやる気のある人を大きな視野で結集して、いろいろなことをやっていきたいと語る。

「紀ノ川農協も認められる規模にはなったけど、まだまだ全部を組織したわけではないでしょ。農業に展望はもっていても、大規模生産で他とはまったく孤立して生産してる若者だってまだたくさんいる。ミカン単作が好きなら、それでもいい。紀ノ川農協にははいらなくてもいい。そういう人たちもふくめて、地域の農業をどうしていくのかを前提にして話し合いのできる舞台をつっていきたいんですよ。これからは、楽しい農業、おもしろい農業をやろうよ。そう提起できたらいいですね」

自分たちの経営が安定してきたから、もう農協の規模も大きくする必要はない。紀ノ川農

協の歴史は、そういう意見とのたたかいの歴史でもあった。

「ぬるま湯の安定はいらない。国際的規模での競争に巻き込まれていくなか、地域の農業を確立するためには、まだまだ自分たちにはやらなければならないことがある」

畑さんも井上さんも松本さんも、口をそろえてそう語る。

担い手が高齢化して継続できない農家があったら、畑を組合で引き受けて、協同で耕せばいい。高齢でひとりでは作業ができなくなっても、みんなといっしょなら農業にはできる仕事がある。農業に従事していない人でも、地域に住んでいる限りは労働力としていっしょにやっていける方向を考えよう。農業技術の科学化や共有化は、まだまだ実践されていない。

農民はだれでも、自分のつくる作物に誇りをもっている。けれどもその誇りが、なかなか自信にまではつながらない。一貫して厳しい農業情勢や、先のみえない将来への不安が先にたってしまうからだ。そんな現状を、どこまで協同の力でかえていけるか。語り合い、自信をもって取り組む農業に構築していけるか。紀ノ川農協の挑戦は、まだまだつづいていく。